

# 長島侯と文人たち

—『独樂園賀詞帖』をめぐって—

中尾和昇

## はじめに

なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、『独樂園賀詞帖』(以下『賀詞帖』)と呼ばれる資料を所蔵している。これは、伊勢長島藩の五代藩主増山雪齋が藩邸内に築いた、「独樂園」に寄題する賀詞集である。当センターでは、この『賀詞帖』の図録を「なにわ・大阪文化遺産学叢書」として出版する予定である(2009年3月)。そこで本稿では、『賀詞帖』を紹介するとともに、いくつかの賀詞について若干の考察を加えたい。

## 長島侯と「独樂園」

増山雪齋は名を正賢<sup>まさかた</sup>といい、詩文・書画・煎茶などに堪能な、近世を代表する文人大名の一人である。大坂から十時梅厓を登用して藩儒に迎え、南画家の春木南湖を御抱絵師とするなど、長島藩の文化振興に多大なる影響を与えた。また、特筆すべきは、木村兼葭堂との関係である。雪齋は大坂加番として在坂中、兼葭堂としばしば対面し、その縁もあって兼葭堂が過釀事件に巻き込まれた際には、彼を領内の屋敷地に庇護した。

「独樂園」とは、その名が示す通り、北宋の司馬光が洛陽での閑居時代に造園した独樂園をふまえている。十時梅厓の著述とされる『長島志』に「子城の北隅に独樂園有り」との記述が残されている(注1)が、現在その独樂園は桑名市立長島中学校となっており、往時を偲ぶことはできない。そこで庭園としての独樂園を探る上で手がかりとなるのが、この『賀詞帖』なのである。

## 『独樂園賀詞帖』

『賀詞帖』には、三十七名の賀詞が収められている。賀詞を寄せた人物は皆川淇園や片山北海など、京都や大坂で活躍した文人たちが中心で、雪齋を軸とした文人交流を窺い知ることができる。また、これらの賀詞には「長島侯命」

や「長島侯需」といった言葉が記されていることから、雪齋の依頼によって賀詞が詠まれたようである。

それぞれの賀詞には絹地が用いられており、それらが折帖に仕立てられている。しかし、そのような仕様になったのはごく最近のことである。市河三陽が著した『市河寛齋先生』(曾祖父である市河寛齋の事跡を年譜風にまとめたもの)には(注2)、

その真蹟三十六葉を寓目してその詩を抄し置けり。統絹に書しその大さ普通詩箋の如し。と記されている。ここで注目すべき点が二つある。ひとつは賀詞の数である。一々挙げることはしないが、三陽が披見した賀詞には現在の『賀詞帖』に収録されている岩垣竜溪の名がない。つまり、一葉分の賀詞が後に加えられたと考えられる。二つめとしては「葉」「詩箋」の文字が示すように、一枚ずつが単体で存在していたということである。

これらのことから考えると、三十七名分の賀詞が折帖に仕立てられたのは三陽が没する昭和二年以降と考えるのが穏当であろう。

## 賀詞を揮毫した文人たち

つぎに、『賀詞帖』に収められたいくつかの賀詞について考えてみる。なお、賀詞の選択については、稿者の恣意によることをお断りしておく。

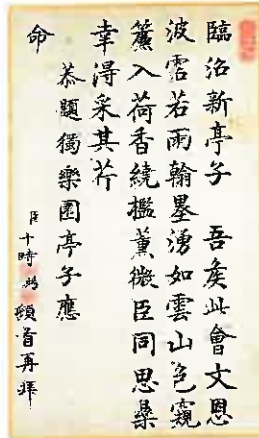
### ①十時梅厓

臨沼新亭子 吾侯此会文 恩  
波霑若雨 翰墨湧如雲 山色窺  
簾入 荷香繞檻薰 微臣同思樂  
幸得采其芹  
恭題独樂園亭子  
命 臣十時賜頓首再拜

十時梅厓は大坂の人。経義に明るく、書画も能くした。書の師である趙陶齋とともに、来坂

中の雪斎に招かれた際、ともに出入りしたことがきっかけで、天明三年（1783）ごろ伊勢長島藩儒に登用された。さらに、同五年（1785）には再建された藩校「文礼館」の祭酒を任されるほど、雪斎との関係は親密なものとなった。

さて、梅厓の賀詞には雪斎の恩恵に対する心情が吐露されている。



十時梅厓 賀詞

「恩波霑若雨」とあるように、雪斎の恩恵を「恩波」とし、それが枯渴を潤す「雨」のようだと表現した。また、「微臣同思樂」には、雪斎とともに「樂」しむことのできる喜びを謳っている。まさに梅厓にしか表現できない詩である。

## ②木村兼葭堂

奉寄題

長島賢侯独樂園

名園新結構 山水愜清心 自

有高人樂 寧須迂叟吟 窓

南多竹樹 亭北宿文禽 想

像端居暇 優遊書与琴

癸卯夏五 木孔恭頓首拜

木村兼葭堂は、大坂北堀江五丁目の造り酒屋坪井屋に生まれた。本草学を津島如蘭・小野蘭山に、画を大岡春卜・柳沢淇園・鶴亭・池大雅に、篆刻を高芙蓉に、詩文を片山北海に学ぶ。また、書籍や標本類の収集家としても知られ、好事の文人として幅広い交遊をもった。

雪斎との関係は、彼の在坂中から始まったとされているが、先に述べたように、寛政二年（1790）の過釀事件において長島藩領内の川尻村に身を寄せたことが、両者の親交を象徴していると思われる。

兼葭堂は賀詞において、独樂園における閑雅を述べている。「窓南多竹樹」「亭北宿文禽」とあるように、亭を囲むようにして竹が生い茂り、山鳥の鳴き声があたりに響き渡る。そして、そのようななかに雪斎は「書」や「琴」に「優遊」するわけである。ただ、注意したいのは、これ

が兼葭堂の「想像」だということである。「癸卯」とあることから、賀詞が成立したのは天明三年ごろと考えられる。この時点では、兼葭堂は大坂に住んでおり、長島を訪れてはいない。雪斎から独樂園のことを聞いていたとも考えられるが、先に少しふれた司馬光の独樂園が、揮毫の経緯をさぐる大きな手がかりとなる。

司馬光は独樂園に関して「独樂園記」という文章を記している。これは『古文真宝後集』に抜粋のかたちで収録されており、きわめて著名な文章である。兼葭堂ほどの文人ならば周知のはずであろう。そこで、「独樂園記」と比較してみると（注3）、

### ●兼葭堂賀詞

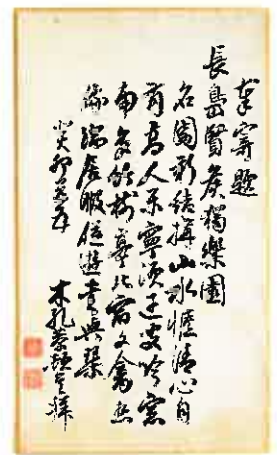
…寧須迂叟吟…

### ●「独樂園記」

迂叟平日讀書…

とあるように、「迂叟」という司馬光の号が引用されている。雪斎を司馬光になぞらえた表現として興味深い。

本稿では紙幅の都合上、これ以上の考察を加えないが、他の賀詞についても同じ例が確認できる。



木村兼葭堂 賀詞

## おわりに

「独樂園」と聞くと、自分一人が独占して楽しむという印象を受けるが、そうではない。極めて謙遜した、自分だけに許された楽しみを意味しているのである。独樂園は、後樂園や偕樂園のように、主君と人民が和樂することを目的とした庭園ではないが、賀詞を依頼された三十七名という限られた人びとにとって、雪斎との交流は、この上ない「樂」しみだっただろう。

## (注)

1. 『長島町誌』上巻、145頁  
(長島町教育委員会、1978年4月)
2. 『復刻 市河寛斎先生』80頁  
(あかぎ出版、1992年2月)
3. 『古文真宝後集』(宝暦五年版、架蔵本)